琉球大学学術リポジトリ

［抄録］沖縄本島におけるそ菜生産に関する報告書

メタデータ	言語:
	出版者: 沖縄農業研究会
	公開日: 2009-01-29
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 銘苅, 春定（抄録）
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002015069

沖縄本島における

そ菜生産に関する報告書（抄録）

農林省園芸試験場久留米支場長秋谷良三技官は、昨年6月26日から7月25日迄の1カ月間民政府経済開発部の招待で来島され、主要そ菜地を視察、調査してその結果を報告された。氏の報告書は、今後のそ菜栽培の方向についてあらゆる観点から考察されているので、その概要を紹介する。

1　沖縄本島に於けるそ菜園芸の特異性

そ菜類の生産は、立地条件により制限を受けることが大きく、沖縄は気候的に亜熱帯圏に入り、そ菜生産上の特異性は次の二期に大別される。

1）　島外出荷期　冬春季は、気候的にも恵まれているのでそ菜の生産も極めて容易であり、島内需給や島外出荷のために、この時期のそ菜栽培は極めて重要である。しかし、1～2月の低温期には低温に敏感な大根、白菜、甘藍類は時に花芽分化を起して生産を阻害し、また、果菜類の生育は著しく抑制されることが予想される。従ってビニール、ポリエチレンなどの利用が有効と思われる。

2）　島内自給期　夏秋季は、台風、高温乾燥、病虫害の多発などの災害が多く、栽培そ菜の種類を制限する上にその栽培は甚だ困難である。この時期においてそ菜生産を阻害する大きな原因は高温乾燥である。夏季の高温を人工的に降下させることは極めて困難であるが、直射光線を遮光し地温上昇を防いでふく射熱を下げるためにヨシズやビニール網を張ったり、地温降下のため敷草あるいは灌漑も有利である。しかしながら沖縄においては、敷草のためにアフリカマイマイの被害が多く、また耕地整理がなされていないためにこれら施設の導入を困難にしている。したがって、今後は耕地整理とアフリカマイマイの駆除を徹底すべきである。沖縄には適当な高冷地はないが、北部の山地開発により夏秋季の端境期を解消することが出来るだろうし、バレイショやその他の種苗育成にも用いられよう。　（18頁へ続く）

2 経営上の特異性と問題点

沖縄の農業を産業別国民所得から見ると戦前に比して経済的地位は著しく低下している。これを経営規模や労働力から見ると、5反未満の農家が72%、自作農が56%となり、また 農業従業者は男83,000人、女111,000人で、年令別に見ると、50才以上が34%を占めている。また農家の家計費の農業収入に対する依存度を本土の南海区（鹿児島、宮崎）に対比すると、南海区の77.8%に対し、沖縄では40.5%で遙かに低く、1町歩以上の農家においてすら農業収入だけには依存しえない実状である。このように零細化した経営規模の農業においては、経営上の集約化を阻み零細化と農業生産性の低下を招く原因となる。しかしながら、今後の農業は集約的な栽培によって有利な換金作物を取り入れるか、経営を協業化して大規模な共同経営の方向に進まなければならないことが予想される。したがって、沖縄においては、灌漑施設、耕地整理、耕地の交換分合、機械力の導入などが重要問題として考えられなければならない。

3 今後のそ菜園芸の動向

（1） 特産地の造成

沖縄のそ菜生産は軍納そ菜として、比較的恵まれた計画生産が行われ、各種の作物を平等に分担して栽培しているが、都市近郊の集約栽培地を除いては夫々の土壌条件に適した作物を選択し、粗放的栽培により収量を上げ生産コストの低減をはかることが必要である。また、特産地の造成は他産地との競合をさけて生産過剰を防止し、生産の安定を保つためにも必要である。（51頁へ続く）

（2） 加　工　園　芸

沖縄のように季節的に生産が著しく変動する地方では、その気候風土を利用して安価な原料を生産し加工して夏秋季の欠乏期に備えると共に海外に市場を求め輸出を計ることが必要かと思われる。加工の方法は、従来の乾燥や漬物ではなく近代食に適合する瓶罐詰やピックル、粉末食品にまで進むことを考え需給の均衡を計ることが必要である。　加工用として今後有望と思われるものは次のようなものと考えられる。

瓶罐詰用　トマト、ピーマン、ライマビーン、インゲン、ソラマメ、タケノコ、ハナヤサイなど

ピックル用　キユウリ、ラッキヨウ、ハナヤサイ。

粉末用　ホウレン草、ニンニク、玉葱、セルリー、トマト。

冷凍用　果菜類。

乾燥用　ショウガ、トウガラシ。

（3） 品種改良及び採種事業

そ菜は食生活の進歩と共に良質のものが要求され、また、生産上は豊産で栽培容易なものが要求されるので、耐暑性、耐病性、耐湿乾性など生理的特性を具えた品種の選抜あるいは育成が重要である。　そのために

（58頁へ続く）

は、品種の導入をはかり、それらを母本とした新品種の育成を進めて行くことが大切である。

採種事業は優良な品種が成立すると、特産的に発展するものであるが、現在沖縄における種苗は殆んど米国、日本に依存している。今後亜熱帯特有の生態的な品種改良が進めばこれに即応した採種事業は当然起るべきものである。　沖縄は気候的に温帯そ菜の採種は不可能であるが、南方熱帯圏に供給する亜熱帯作物の採種地としては好適するものと思われる。近年南方圏に供給する採種地として鹿児島県の種子島や奄美大島が利用されている。種類としては、甘藍、ハナヤサイ、ハクサイ、カラシナ、ホウレン草、シユンギク、ダイコンなどである。（琉球農試園芸係：銘苅春定）